✧ 2014年1月研究会報告✧

「戦前、戦中、戦後の国産カメラ」

日時:2月8日　14時15分～45分

会員番号0023

矢澤征一郎

日本のカメラ製造は、技術性能共、現在世界のトップに立った。その過去を振り返ってみると原動力の源は日本人の勤勉さと努力の結果である。またユーザー側から見ると元来のカメラ好きの国民性も見落とせないように思う。

今回、「戦前」とは昭和12年に始まった日中戦争以前、「戦中」はそれ以降、昭和14年から欧州で始まり、昭和20年に終わった第二次世界大戦終結まで、「戦後」は昭和20年の終戦から昭和30年までとして区分した。

またカメラの選択には日本の歴史的カメラに撰者の独断と偏見を加えたことに寛大な容赦を願いたい。

■　戦前(昭和12年以前)

光学、レンズ製造、光学ガラス製造、カメラ・光学製品製造を先進国に学んだ時代である。この時代光学研究者や光学設計者は、カール・ツァイスの熱心な信者であり、また光学機器の先進国であったドイツの製品に強い羨望の念を持っていた。これらのことが日本に於ける光学製品やカメラの発展の大きな要因として挙げられる。

写真1、2に精機光学研究所(昭和12年に精機光学工業に改組)のカンノンの昭和9年の広告とパンフレットを掲げる。最初の広告はアサヒカメラ6月号、カメラの姿はイラスト風である。8月号とパンフレットは同じで実物感が高い。9月の広告ではライカの特許(日本で実用新案として成立、日本の場合実用新案は有効期間が違うだけで効力は特許と変わらない)を避けて中央のビューファインダーを折り畳み格納式に変更している。

昭和10年12月、ハンザ・キヤノン、ニッコール50mm F3.5(黒マスク、mm表示)付を275円で発売した(写真3)。国産初の高級35mmレンジファインダーカメラである。カンノンの面影を残して製造発売された最初のキヤノン。レンズおよび連動距離計関連部分を日本光学工業(現ニコン)が担当するなど精機光学研究所(後のキヤノン)と日本光学工業の共同から生まれた。

同じ昭和10年には、スーパーオリンピックD(写真4)がオリンピックカメラ製作所(旭物産)から発売された。国産初の135フィルム使用の24×36mm判レンズシャッターカメラである。昭和11年栗林写真機製作所(後のペトリ)から国産初の120フィルム、6×6cm判スプリングカメラのファーストシックス(写真5)が発売された。レンズは東京光学のトーコー、シャッ

写真3　ハンザ・キヤノン

写真1 左からアサヒカメラ昭和9年6月号、8月号、9月号の広告。9月号で折り畳みファインダーが付く

写真2　カンノンのパンフレット

写真4 スーパー・オリンピックD

写真5
ファーストシックス

写真6 オリンパス・スタンダード

写真7 マミヤシックス Ⅰ

写真8 メイカイ1号

写真9 メイカイ・レフ

ターは精工舎のコンパータイプのSセイコー付と高品質な純国産品であった。

■ 戦中(昭和12年～20年)

写真6は、昭和13年に発表されたオリンパス・スタンダード。高千穂製作所(後のオリンパス光学工業)が製造した127フィルム使用の4×5cm判高級レンジファインダーカメラであった。先進的高性能カメラであったが、日中戦争が始まり、約10台で製造を中止された悲運のカメラであった。カタログが製作され、広告が行われるまで進行していた。

写真7は、昭和15年発売のマミヤシックス1で、マミヤ光機製作所が製作した120フィルム6×6cm判スプリングカメラ。マミヤシックス独特の距離計と連動してフィルム面を移動させる特殊な焦点合わせ方式をもっている。

写真8は、昭和15年東郷堂写真工業から発売されたメイカイ1号。専用裏紙付35mm幅フィルムとシートフィルム1枚撮り兼用の3×4cm判、横型二眼レフ。同じく昭和15年発売の専用フィルム使用3×4cm判横型二眼レフのメイカイレフ(写真9)もあった。

写真10は、昭和16年頃発売の建国写真機で円カメの一種である。漢字のネームプレートが印象的である。専用シートフィルム3×5cm判1枚撮りで、写真文化の底辺を支えたカメラの一つである。

昭和17年には理研光学工業が127フィルム使用の3×4cm判固定鏡胴型カメラのゼッサン(ZESSAN、絶賛)を発売(写真11)。昭和17年は民需用カメラの生産規制が強まった年でもある。

昭和18年東京東亜光機社が120フィルム、6×6cm判スプリングカメラのユーゲンⅢを発売(実際の発売は栄光堂本店を通してであった(写真12)。戦争の真っ最中のため部品の一部は表面仕上げがない素材のままで、シャッター羽根は黒染め処理がなく、張り革は紙製の擬革であった。

■ 戦後(昭和20年～30年)

昭和20年8月第二次世界大戦が終わる。その翌年の昭和21年マミヤシックスⅢ(戦後型)の再生産が始まった(写真13)。この時、戦争中に培われた同業種仲間の部品融通が生かされた。

写真10 建国写真機

写真11 ZESSAN(絶賛)

写真12 ユーゲンⅢ

写真13 マミヤシックスⅢ (戦後型)

写真14 ミノルタ 35 Ⅰ

写真15 オリンパス 35 Ⅰ

写真16 カロル(Carol)

昭和23年にはミノルタ35Ⅰ(写真14)、オリンパス35Ⅰが相次いで発売された(写真15)。この2機種共135フィルムに24×32mmの画面サイズを撮るいわゆる日本判を採用していた。他にもこのサイズを採用していたものにニコンⅠ、ミニヨン35(A、B)、ホトカ35(国際光機)がある。同じく昭和23年、ボルタ判フィルム採用の高性能カメラ、カロル(写真16)が八洲電機光学部から発売された。

昭和23年4月9日、富士写真フイルムは、初めてのカメラであるフジカシックスⅠA、ⅠB(写真17)と、富士天然色フィルムを足柄工場において同時に発表した。フジカシックスⅠAとⅠBの違いはレンズの明るさのみで、ⅠAはF4.5、ⅠBはF3.5付である。どういう理由かⅠBの出荷が遅れ8月の発売となった(写真 はⅠB)。富士写真フイルムの写真用レンズとカメラはほとんど同時期の開発と思われる。最初のレンズは、フジ(Fuji)の名称で営業写真用の組立暗箱(フィールドカメラ)用に生産された(写真18)。このFujiというレンズ名は最初のカメラ、フジカシックスⅠA、ⅠBにも採用されている。シャッターはロータス(LOTUS)シンクロなしで、このFujiとLOTUSの組み合わせが特色である。

昭和27年には旭光学工業から国産初の35mm一眼レフレックスカメラ、アサヒフレックスⅠ(写真19)、昭和30年には国産初のペンタプリズム付一眼レフであるミランダTがオリオンカメラから発売された(写真20)。なお有名でよく知られているカメラについては詳細を省かせて貰ったことをお断りしておく。

なお、軍用光学機器(光学兵器)、顕微鏡については何も触れなかったが、戦前、戦中にこの分野で養われた技術が戦後光学メーカーに受け継がれ、世界最高の光学製品、医療機器、デジタルカメラを造り上げたのであろう。

写真17 フジカシックス ⅠB

写真19 アサヒフレックスⅠ

写真20 ミランダ T

写真18 富士写真フイルムのレンズ“フジ”